

## 新・島根の中山間地から Work as Life

### 第1回

### 「想像力と、内側からの理解」

野中 浩一



### 1. あなたの「哲学」は何か

先日、恩師である村山正治先生から声をかけていただき、東亜大学大学院の集中講義で話をさせていただいた。拙著「カウンセラー、元不登校の生徒たちと、フリースクールをつくる」の出版記念も兼ねていただいていたため、本の題名そのままに、フリースクールでの高校生たちとの日常や、子どもたちと一緒に成長していくために必要な過程や集団形成について話をしてきた。



その話が終わったのち、村山先生から私に「野中さん自身が、フリースクールを運営するうえで一番大切にしている哲学は何ですか」との問いをいただいた。私はすぐに答えることができず、少し考えてから「(生徒と接するときに)自分が自分らしくあることだと思います」と答えた。しかし答えはしたもの、言葉だけがひとり歩きしたような、答えとしてじっくり馴染まないような感じが残った。

## 2. つっかえ感

それから1週間が経ち、フリースクールの生徒の保護者さんから情報をいただき、約200名が参加する教育フォーラムに足を運んだ。そこでは社会教育士、学校コーディネーター、高校魅力化に連なる取り組みが紹介されるとともに、参加者同士で話し合う参加型イベントが行われていた。

司会の方とパネリストの方とが「伴走」についてのトークを繰り広げるのを聞きながら、私の頭の中で雑多な考えが巡るのを感じた。なぜ自分は今の仕事をしているのか。身銭を切って、リスクを冒してまで、17年間もフリーランスでこの仕事をやっているのか。もしくは、そうした形でしかやっていけないのか。

また、今回のような大イベントで、その業界の流行の先端をいつている取り組み、地域や人を明るい光で照らそうとする試みに対して、何かしらの抵抗感や猜疑心が芽生えてくるのはなぜだろうか。(※1)

## 3. はぐれる、つながる

私は、不登校の児童・生徒と親和性が高いと感ずることがある。ただし私自身は不登校になった経験はない。そんな私が今の仕事をするうえでの粘りや執着に繋がる原体験は、間違いなく子ども時代の転居・転校体験であろう。

学校から帰ると母が泣いている。子どもである私には、次に行く場所が突然に告げられる。1か月後には家が段ボールだらけになり、クラスの友人と別れの言葉を交わす。好きだったシールやカード、プラモデルなどを交換し合う。そして次の土地に行き、初めての登校をして、知らない人に囲まれる。

父の転勤は大なり小なりこのような感じで、2年おきに繰り返された。神戸、福岡、鹿児島、東京。父と母と私。核家族だったわが家は、(少なくとも私と母にとっては)頼る人がいない土地を、短いスパンで放浪した。行く先々で親切にしてくれる人はいり、気遣ってくれる人もいた。しかしそうした特別な感ずは初めの数週間だけで、お互いに慣れてくると初めの過剰なまでのブームは去り、波が去ったあとにぽつんと自分だけがとり残される。まだ子どもであったこともあり、どの土地でも遊び友達はできたが、友達やクラスメートとの関係を通じて、長年の積み重ねのある・なしによるズレ感や、その土地に生まれ育った子だからこそ身に沁みついている場所感(親子間や友人間で長年交換・共有されてきた感覚群や情報群)のなさを、折々に感ずずにはいられなかった。

子どもの頃の私は常に、馴染んだ土地からはぐれ、やっとな関係を築いた人ともはぐれ続けていた。そして新たな場所で、その土地に長年住む人との圧倒的な格差の中で、少ない情報と多少の足がかりを駆使

して、新たな関係を模索した。

## 4. なぜ公平なのか

尾崎豊のシェリーの一節、「シェリー、俺ははぐれ者だから、お前みたいにうまく笑えやしない」という感覚。別の言い方をすれば、ふと褒められたときに、なんと返していいか分からず思考停止するばつの悪さの感覚。シェリー的な意味において、私は不登校との親和性が少なからずある方だと自認している。

不登校になりがちな子は、よく何かからはぐれる。言葉、時間、もの、イメージ、目的。はぐれたことに気づかれないままに、集団の中で摩擦が増大し、流れからはじき出され、一緒にいるのに別世界をさまよう存在になる。そして何らかのきっかけで私のところに来る場合がある。

生徒の中で、小学校低学年から学校に行っていない、筋金入りの不登校だった子がいる（そうした子は決して珍しくはない）。高校1年から私のところに通い、朝から夕まできっちり勉強して、合宿や修学旅行のときには一緒に離島や東京に行ってきた。寡黙ながら勤勉である。私が主催するフリースクールでは、毎昼、生徒と職員二十数人が車座になり即興のテーマ（※2）で各自ひと言ずつ話す時間がある。そうしたとき、その子は楽しそうに自分の考えを話す。普段、自分から進んで話をしない子や、自分の意見に自信がない子もまざまざいる。しかし、そうした子も自分なりの考えがあり、なんでそう考えるかを聞けばはっきり答えてくれる。

面談の際、生徒のお母さんから「どうしてそんなに公平に接する場ができるんですか」と聞かれたことがある。本当に公平であるかの自信はないが、公平でありたいとは願っている。特に子どもは、新参者や勝手がわからない者ほど、ものを言うことは難しい。だから、ほとんど声をあげない子の声を聞く。その場にいない子の存在を味わう。これらは私の内にある感覚と共鳴しているため、自然な行為である。

また反対に、声が大きな子2~3人が言った「キックベースしたい」という意見。それを聞いて「みんなが言うからキックベースしよう」という大人の「みんな」の感覚。その「みんな」に自分が入っていないときのいたたまれなさ。遠足やグループ授業でグループ分けをするとき、（クラスの関係性をマネジメントできていない中で）「自由に組んでいいよ」という先生の感覚。ほぼ選択肢がない一本道の既定路線を「自由」と呼ぶその想像力。わが家で繰り返された転居は、こうした疎外を招く言動をキャッチする電波塔を、私の頭にずばずぼと増設していったようである。

疎外のされ方にもいろいろある。いじめや仲間外れなど表面上や水面下で起こるトラブルによる疎外もあるが、目に見えないズレや違和感の蓄積により、関わりの中核から相手がやんわり引いていくような疎外もある。学校に限ったことではなく、家であれ、SNS上であれ、関わりをもちたい相手の視界に入っていない自分を感じ続けることで、自分が消えてしまったような感覚に陥ることがある。不登校か

どうかなどは関係ない。人と人との関係をもつとき、目に見えないものやその場にはないものを捉える感性が存在することを願う。眩しい世界には、そうした日陰への配慮が欠けていると感じてしまう場合がある。嫌いなのはそういうところであろう。

## 5. 内側からの理解

村山先生からいただいた問いを、その後もずっと考え続けている。その中で、私の哲学は想像力ではないかと思いついている。ここで言う想像力の対象は、その場にいる人や、語られる言葉だけではない。むしろ、その場にはいない人、見過ぐすと発されない言葉、その子自身も気づいていない自分、言葉にできない感覚。そうした目に見えない何かと対話し続ける想像力である。

その人の人生は、言わずもがな、その人のものだ。また、その人本人以外で、その人の人生に大きく左右されるのは（及びその人の人生を大きく左右するのは）、家族である。その一方で赤の他人の私であるが、関わった生徒やそのご家族の求めがあれば、一生関わっていくつもりでいる。それと同時に、その生徒やご家族の求めがなければ、ほんの数年、日々を共に過ごすだけの行きずりの 1 人であるとも考えている。これは私や主催するフリースクールに限らず、学校や先生、病院や医師も同様であろう。

だからこそ、私は（一生関わるつもりで）思ったことや感じたことをハッキリ言う一方で、その考えはあくまで行きずりに過ぎない私の考えであり、その生徒またはそのご家族にとって大事なことは、その人が最も自分らしく生きられることであると考えている。そのため、心理師であり、福祉師であり、教育者である私は、その人が今向いている方向を理解し、私もその方向を向いて話をする必要があると考えている。

こうした関わりの中核については、先達の言葉に委ねたい。ロジャーズ曰く、相手に「変化を起こさせる」のは、接する側の「態度や方法がどのように（相手に）知覚されているか」だと述べている。また、接する側が「一致した、あるいは透明な状態であり、その言葉と感情が調和した状態にあって矛盾がなければ」、また接する側が相手に「無条件に好意をもっていれば」、そして接する側が相手の感情を、相手が「感じるままに理解すれば」、効果的な援助関係となる可能性が極めて大きいと述べている。

また、諸富（2021）は、自分目線のものさしを相手にあてはめて評価したり判断したりするのではなく、「内側からの理解」が重要な視点であると述べている。大切なことは「ああ、この人は、まるで私自身のように、いや、もしかすると、私以上に、私自身になりきって、私自身の内側から、私のことを理解しようとしてくれている。」と感じる理解であり、フレーム・オブ・レファランス（the internal frame of reference）による、相手の内側に入りこむ視点であると述べている。（※3）

発達障害がどうか、学校での適応がどうか、そうした外側からの目線は、本人の人生の歴史からすると、一見さんでしかない他人が持ち出すヒトゴトであろう。多くの場合、本人の目線はまったく別のと

ころを見ており、家族の目線もまた別のところにある。松岡（2014）は、「自分が見ているものと全然違うものを相手が見ていることに気づくときの違和感こそが、文化人類学でものを見ることのおもしろさである」と述べている。私は経験上、この違和感に気づくことができているならば、大概の問題はほぐれると感じている。それは、相手との対話の積み重ねによる相互理解、現在に至るまでの状況や環境の把握、そしてそれらを基にした想像力が作用していることを意味するからである。

人は誰しも、成長する奔流を内在している。身近な人のその流れを、想像力をもって一緒に感じることでできれば、これ幸いである。

※1 この言葉は、参加していた個人やその取り組みに向けたものではない。ある先進的な取り組みがムーブメントとなり、良い取り組みであるとの認識が生じて組織化や公的機関との連携により予算化されたときに、そこの中に含まれないものを想像してしまうのが私の質であり、その点を指している。

※2 ここ最近のテーマは「体育のトラウマ」「家族」「これはイヤ」「陰キャ」「異性」など。著者が事前にエピソードトークをしてからテーマ発表をすることもある。その日の集団の雰囲気、生徒との会話、天気や時事など、場を感じながら即興性をもって設定される。

※3 公立の学校がこうした内側の理解を取りこむためには、溢れる足し算の世界を抜けて、引き算をすることが必要であろうと考えている。それは部活動や労働時間などの「ものごと」の引き算ではなく、積み重なりすぎて微動だにしない、制度や規則など「管理の枠組み」の引き算である。この引き算の参考になる視点は、数十年に一度行われる神社の遷宮ではないだろうか。

#### 引用・参考文献

H.カーシェンバウム, V.L.ヘンダーソン編 伊東博, 村山正治監訳 (2001)『ロジャーズ選集 (上)』誠信書房

松岡悦子 (2014)『妊娠と出産の人類学 リプロダクションを問い直す』世界思想社

諸富祥彦 (2021)『カール・ロジャーズ カウンセリングの原点』KADOKAWA